

【A 会場・大会委員会企画】

副用語の歴史的研究の現在

司会：川瀬 卓（白百合女子大学）

発表：川瀬 卓（白百合女子大学）

林 禎映（全南大学(韓国)）

川村 祐斗（愛知淑徳大学）

川島 拓馬（富山大学）

本パネルセッションは、「副詞」「接続詞」「感動詞」といった、いわゆる副用語に注目し、文法変化を考えるうえで副用語がもたらす知見とその可能性について示す。

発表1「文法史研究としての副詞研究」では、語構成的側面への注目、連体修飾構造という統語的環境への注目、感動詞化における語用論的要因への注目という3つの観点をとらえ、文法変化の問題を考えるうえで副詞が様々な知見をもたらしているものであることを示す。発表2「評価を表す陳述副詞の史的展開」では、評価を表す陳述副詞の史的展開に見られる意味変化、形態・統語的变化の諸相を示す。意味変化には、意味の抽象化という一般的な傾向が見られる一方で、語構成要素や文脈上読み取れる意味、類似表現との関係からの影響によるさまざまな経緯が窺える。形態・統語変化については、副詞形成に見られる形態的特徴や、単文・主節から複文の従属節への出現位置の変化、連体修飾構造に用いられる事例などを取り上げる。発表3「接続詞における対人的意味の獲得—サレバを事例として—」では、いわゆる接続詞が対人的意味を獲得する事例としてサレバの歴史の変遷を取り上げる。もともと順接確定条件を表していたサレバが、対人的意味（相手の話題を受け入れていることを相手に知らせる働き）を持つようになる過程について、本文種別と発話における出現位置に注目して記述する。発表4「近代語における接続詞の成立と多様な展開」では、近代語における接続詞の多様なあり方を捉えることを目的に、新たな接続詞の成立、および文章ジャンルによる使用傾向に関わる論点を提示する。前者については「一方」を例に、接続助詞的な用法との関係性、また接続詞として成立する上で重要と思われる特徴について述べる。後者については、近代の演説に見られる接続詞の使用傾向に着目し、演説や現代の独話と比較することでその特徴を明らかにする。

【B 会場】

日琉諸方言の推量表現の諸相

司会：船木 礼子（神戸女子大学）

発表：船木 礼子（神戸女子大学）

松丸 真大（滋賀大学）

日高 水穂（関西大学）

仲原 穰（琉球大学非常勤講師）

このパネルセッションでは、いわゆる「推量表現」に焦点を当てて日琉諸方言の対照研究を行う。方言の文法記述が進んでモダリティについての研究も深まりつつある現在、「推量表現」に相当するものだけ見ても、形態論的特徴、構文的特徴、意味的・運用的な制約など、さまざまな様相が観察される。また、現代の標準語では「推量表現」としては使われていない諸形式が方言の体系内でどのような位置づけにあるのかを見ることも、モダリティの史的变化を考えていく上で示唆に富む。「推量表現」をめぐる各方言の多様な報告をきっかけに、参加者とともに日琉諸方言のモダリティについて理解を深めたい。

はじめに概要を説明したあと、まず発表 1（松丸真大）で、各方言の記述調査に用いた「推量表現 共通調査項目」について説明し、調査のねらいを把握してから、一例として「京都市方言の推量表現」について報告する。発表 2（日高水穂）では、推量表現に「ジャロー」と oR 形式（「ウ・ヨウ」形）を併用している広島県三次市方言を取りあげる。この方言では oR 形式に「ジャーナーカ」およびその下略形の「ジャー」を付けて推量表現を弁別的に表していることを指摘する。発表 3（仲原穰）では、沖縄語の首里方言を扱い、「ハジ」「ラ語尾」「エーサニ」「テー／デー」「アラニ」「ガヤー」等の推量関連表現について報告する。発表 4（船木礼子）では、「らむ」由来といわれる「ロー」を用いる高知方言を取りあげる。「ロー」は接続の制約があるが、近年「ヤロー」などとの使い分けが変容していることを述べる。

諸方言の「推量表現」について視野を広げて対照することによって、モダリティに関する理解を深めていく。

【C会場】

「よい」文法記述」について考える
—分類・周辺・例外・理論といかに向き合うか—

司会：三好 伸芳（武蔵野大学）

発表：阿久澤 弘陽（京都大学）

大江 元貴（青山学院大学）

鈴木 彩香（千葉大学）

井戸 美里（国立国語研究所）

指定討論者：井原 駿（津田塾大学）

本セッションでは、「よい」文法記述」とはどのようなものかという点について、多くの文法研究者が直面するであろう研究上のタスクを取り上げながら、具体的な事例とともに議論することを目的とする。「よい」文法記述」について考えることで、文法記述について多角的な評価を実現できるだけでなく、これから文法研究を志す人にとって有益な知見を提供することができる。本セッションでは少なくとも以下の観点が「よい」文法記述」を実践する際に重要になると考え、各パネリストがそれぞれの研究事例を題材に発表を行う。

- ・ 正確性…言語事実を正確に一般化することができるか。
- ・ 経済性…より少ない概念や単純な規則のもとで、広範な言語事実を説明できるか。
- ・ 明瞭性…提示されている概念や規則が客観的で明示的なものになっているか。
- ・ 新規性…既出の知見や自明の事柄ではなく、新しい事実を捉えられているか。

これらの観点到十分配慮すれば「よい」文法記述」が実現することは当然と言えるが、完全に両立させることは必ずしも容易ではない。例えば、分類概念を立てると分析の正確性が向上する可能性があるが、必然的に概念装置レベルでの経済性は下がる。また、周辺事例を取り上げる場合には新規性が保証されやすくなる半面、明瞭性とコンフリクトが生じやすくなるだろう。文法的な一般化は、その裏返しとして例外事象を認めることになるが、しばしば経済性を重視して一般化を緩やかなものとするか、明瞭性を維持して例外を受け入れるかという選択を迫られることになる。さらに、現象駆動型の記述的研究と概念駆動型の理論的研究との橋渡しは長年にわたる研究コミュニティの課題であり、そのような場では正確性と明瞭性との間で緊張関係が生じやすい。このような事例の検討を通じ、文法記述における技術的な問題の洗い出しを行い、「よい」文法記述」について理解を深めていく。

【D 会場】

アカデミック・ライティングのための初級文法項目の再学習

司会：高梨 信乃（関西大学）

発表：高梨 信乃（関西大学）

朴 秀娟（神戸女学院大学）

庵 功雄（一橋大学）

初級文法項目の再学習とは、初級の文法項目を中級以降で再度学ぶ機会を学習者に提供するものである。ただし、単なる復習ではなく、「学習者が必要とする能力に合わせて取り上げる項目を選び、指導のポイントをしばって再度学ぶ機会を与えることにより、学習者が必要とする使用につなげる」という意味で用いる。本パネルセッションでは上級学習者のアカデミック・ライティング（以下、AW）のための再学習を考察する。

高梨発表では、学習者の不使用の問題がみられる対比の「は」に注目する。教科書調査により対比の「は」の従来の指導の状況を、研究論文の用例調査により AW での対比の「は」の多様な使われ方を明らかにした上で、両者の間のギャップを埋める指導のポイントを探る。具体的には、AW における用例に基づいた空所穴埋め問題により学習者と母語話者の対比の「は」の用い方を考察する。

朴発表では、AW で図表を提示する際に用いられる述語のテンス・アスペクトに注目する。図表を提示する述語のテンス・アスペクトの選択には一定の傾向があることを示し、上級学習者には、文型・表現そのものだけでなく、①図表の提示に用いられる述語のテンス・アスペクト、②テキストの流れを意識したテンス・アスペクトの選択、③図表を提示する主体の存在有無の 3 点をも意識したテンス・アスペクトの再学習が必要であることを提案する。

庵発表では、多くの学習者が学習困難を感じている自他について、まず、中上級レベルで取り上げるべき自他に関する内容を指摘する。次に、初級文法項目の再学習という観点およびアカデミック・ライティングとの関連から、漢語サ変動詞の自他について考察する。具体的には、BCCWJ の調査結果を踏まえ、「自動詞」と「自他両用動詞」の区別を実質的に廃止するという漢語サ変動詞の自他に関する新提案を行う。